

小学校英語教科化の前に授業目標を考える

澁井 とし子

The Goal Setting of Elementary School English as a Subject

SHIBUI Toshiko

The Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology announced that the elementary school English would be a subject in 2020. The third and fourth graders at elementary school are going to have 35 English classes and fifth and sixth graders would have 70 ones in a year. However, it is not enough to only make class numbers big, but to solve some difficulties of English classes is required in order to take sufficient lessons for children. Therefore, this paper attempts to propose setting new class goals for the new courses of study for school education including four skills (listening, reading, speaking and writing).

はじめに

2011年に必修化となった小学校外国語活動が、2020年には小学校英語として教科化になることが文部科学省より発表された(2013)。新学習指導要領では、小学校中学年で年間35時間の授業を行い、そして小学校高学年では現行の年間35時間の授業時間数が70時間に増加する。もう既に70時間に対応できるような取り組みを始めている学校も見受けられるが、その他の多くの学校ではどのように対応したらよいか課題のようである。授業時間が増えるからと言って単に時間を増やして、英語の時間を確保するだけでは本来の小学校英語の目的が達成されない。教科化になると新学習指導要領が示すように今までの「聞く」「話す」といった音声中心の授業から、小学校高学年では「書く」「読む」の2技能が加わり、4技能を扱うことになる(文部科学省, 2017a)。従って、それらの4技能を扱った適切な授業内容を考える必要がある。そこで本研究では、本論で現在の小学校英語に関する課題を5点挙げ、そしてそれらを教科化に向

けて小学校高学年の授業目標として取り組んでいくことを提案する。次章では、新学習指導要領の内容と先行研究を概観し、第2章では本研究の目的について述べ、最終章では今後の課題を考察する。

1. 学習指導要領の内容と先行研究

1.1 現在の小学校外国語活動の目標

小学校外国語活動（英語）の目標は、2011年に必修化された時には、「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーションの素地を養う。」（文部科学省, 2008）であった。そして、育成を目指す資質・能力の3つの柱は、①知識・理解的目標 ②情意的目標 ③技能的目標 であり、英語を子どもたちに教え込むのではなく、あくまでも音声中心で英語やその文化に慣れ親しみながらコミュニケーション活動を行うことが目的であった。

1.2 新学習指導要領での小学校英語の目標

2013年12月13日に発表になった「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」（文部科学省, 2013）によると、「初等中等教育段階からグローバル化に対応した教育環境づくりを進めるため、小学校における英語教育の拡充強化、中・高等学校における英語教育の高度化など、小・中・高等学校を通じた英語教育全体の抜本的充実を図る。2020年（平成32年）の東京オリンピック・パラリンピックを見据え、新たな英語教育が本格展開できるように、本計画に基づき体制整備等を含め2014年度から逐次改革を推進する。」と明記された。また、2017年の文部科学省小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック（文部科学省, 2017b）には、小学校3、4年生は「外国語活動」を行い、5、6年生は教科化になり「外国語」を行うと記されている。

新学習指導要領では、小学校3、4年生が行う「外国語活動」の目標を「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、話すことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る素地となる資質・能力を次のとおり育成することを目指す（文部科学省, 2017b, pp.15-16）。

- (1) 外国語を通して、言語や文化について体験的に理解を深め、日本語と外国語との音声の違い等に気付くと共に、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しむようにする。
 - (2) 身近で簡単な事柄について、外国語で聞いたり話したりして自分の考えや気持ちなどを伝え合う力の素地を養う。
 - (3) 外国語を通して、言語やその背景にあるその文化に対する理解を深め、相手に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。
- と定めた。

一方、小学校5、6年生が行う「外国語」の目標は、「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を次のとおり育成することを目指す（文部科学省、2017b, pp.16-17)。

- (1) 外国語の音声や文字、語彙、表現、文構造、言語の働きなどについて日本語と外国語の違いに気付き、これらの知識を理解するとともに、読むこと、書くことに慣れ親しみ、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能を身に付けるようにする。
- (2) コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、身近で簡単な事柄について、聞いたり話したりするとともに、音声で十分に慣れ親しんだ外国語の語彙や基本的な表現を推測しながら読んだり、語順を意識しながら書いたりして、自分の考えや気持ちなどを伝え合うことができる基本的な力を養う。
- (3) 外国語の背景にある文化に対する理解を深め、他者に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。

となり、高学年は、4技能5領域（聞くこと、読むこと、話すこと【やり取り】、話すこと【発表】、書くことを扱うことになる。また3つの柱（案）も①学びに向かう力、人間性等（どのように社会・世界と関わり、より良い人生を送るか）②思考力・判断力・表現力等（理解していること・できることをどう使う

か) ③知識・技能 (何を理解しているか、何ができるか) としている (吉田, 2017b)。

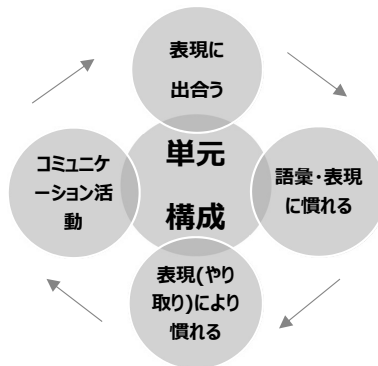
しかし、新学習指導要領になっても変わらないこと、それは「音声中心であり、聞くこと重視」の英語活動である (文部科学省, 2017b)。高学年の活動内容を見てみると、従来の“Hi, friends!”で行っていた「聞くこと」と「話すこと」を更に発展させた「話すこと【やり取り】」や「話すこと【発表】」そして「読むこと」「書くこと」が次のような活動として追加されている。

例) Small Talk / Let's Watch and Think / Let's Talk /

Let's Read and Write / Story Time / Sounds and Letters

(文部科学省 小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック2017b, pp.60-63)

また、授業時間数も1単元4時間程度であったものが8時間扱いになり、次のように「表現(やり取り)により慣れる」部分で繰り返し本時の言語材料に触れることができるようになっている。1単元4時間の時と比べると授業内容に追加された「読むこと」「書くこと」を入れながら丁寧に同じ言語材料を使って授業を行うことができる。



「文部科学省小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック」2017b, p.176より
澁井作成

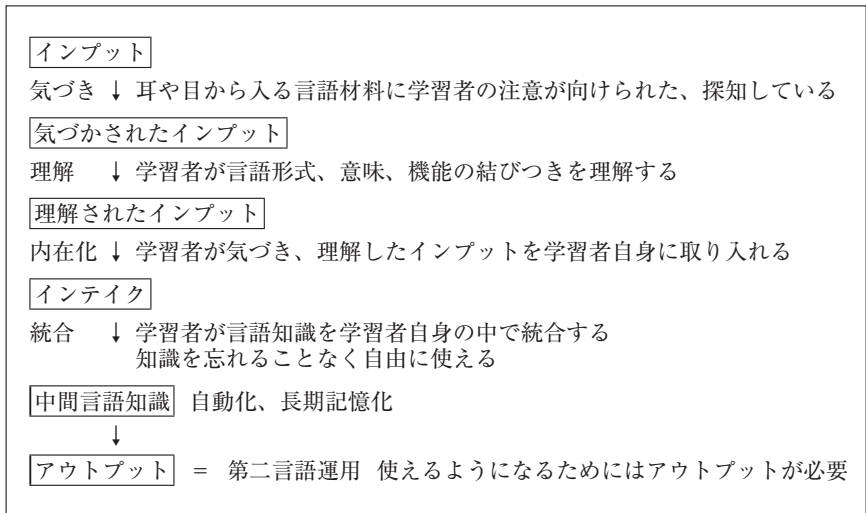
従って、上記のように単元構成を工夫し表現により慣れることで、インプットしてすぐにアウトプットを迫るということを防ぐことが可能となる。

1.3 先行研究

村野井（2006）は、インプットされてからアウトプットされるまでの第二言語習得の認知プロセスを以下の通りに示している。言語材料がインプットされた後、学習者に「気づき」が起こり、それらの言語形式、意味、そして機能などを理解して、学習者がそれらを取り入れ、学習者の中で統合されて初めてアウトプットとして、口から発することができる。

岡、金森（2015）は、子どもたちにできるだけたくさんの英語にふれさせた方が良いが、その際に「インプットの質をできるだけ高め」、更に「目的をもって使うような要素が不可欠」であると述べている（p.48）。また、小学校では「あいまいさに耐えながら聞き続けて理解しようとする資質」（p.36）が児童に育ちつつあるため、それを育てることの大切さも述べている。つまり、インプットからインテイクまでの段階を経る必要があり、インプットを行った後、すぐにアウトプットできると考えることは、第二言語習得の認知プロセス（村野井, 2006）から見ると適切ではないことがわかる。

第二言語習得の認知プロセス（村野井, 2006）



また鳥飼（2016）は、英語を使えるようにするためには単語を暗記しているだけでは不十分で、会話の相手や状況によってそれぞれの単語のニュアンスが

変化し、話す時にその場で起きた出来事（コンテキスト）によって意味が変わってくるので「まとまったセンテンスなりパラグラフの中でどう用いられているかを知らないと結局は使えないことになる。」(p.48)という問題があると英単語を機械的に暗記することに警笛を鳴らしている。更に小学校での英語について、吉田（2017a）も読売新聞2017年6月16日の記事「学ぶ育む」の中で「毎日単語を10個覚える」といった学習よりも、「コミュニケーションを主体として、知識や技能を身に付ける指導が必要」と指摘している。

ベネッセ教育総合研究所（2017）は、同記事の中で中学1年生が「小学校英語が役立った」と回答したのは全体の5割であり、「小中学校の英語教育の接続が円滑になされていない実態が浮き彫りになった形だ。」と記しており、小学校5、6年生への英語教育（外国語活動）が歌やゲームなどが中心で、英文法と英単語を本格的に習得する中学での学びに繋がっていないことが原因ではないかと見ている。

澁井（2017）の大学生への英語学習に関するアンケート調査によると、中学1年生で英語を苦手と感じていた学生が多かった。その理由を尋ねると「英単語がわからない、文法がわからない、ドリル式に意味もなく繰り返す」(pp.132-133) ことで苦手になったとの回答が多かった。しかし、彼らも外国の友達を作りたい、映画を英語で見たい、しゃべれるようになりたい等の意欲はあるため、意味のあるコミュニケーションを図るための適切な指導も必要であることが明らかになった。

2. 研究の目的と方法

2.1 研究の目的

- (1) 東京都、神奈川県、埼玉県、千葉県の小学校で小学校外国語活動（英語）の授業見学を行い、研究協議会に参加することで、共通する課題が浮き彫りになった。そのため、それらを整理し、どの点が小学校英語の課題であるのかを明らかにすること。
- (2) 課題を新学習指導要領の目的に合わせて今後の小学校高学年の目標として取り組むための手立てとサンプルを提案すること。

2.2 研究方法

研究時期：2015年4月～2017年10月

授業見学場所：東京都、神奈川県、埼玉県、千葉県の小学校

研究方法：東京都、神奈川県、埼玉県と千葉県での小学校外国語活動（英語）の授業見学（小学校1年生～6年生）、及び研究協議会への参加

3. 現在の小学校外国語活動（英語）の授業課題と今後の授業目標

3.1 現在の小学校外国語活動（英語）の課題（小学校高学年対象）

1都3県の小学校で授業見学を行い、各校の研究協議会に参加することにより、授業者及び参加者のコメントにより以下のような5つの授業課題が明らかになった。

授業課題：

- ①インプットが不十分でアウトプットを急ぎ、「発話しただけ」が多い。
- ②会話の状況設定とやり取りが不自然で、目的が不明瞭である。
- ③児童が自分の考えを持ち、しっかりと伝える機会が少ない。
- ④文字指導（書く・読む）の方法がよくわからない。
- ⑤児童が小学校での学びを覚えていることが少なく、中学校へと繋がらない。

3.2 現在の授業課題を目標に変える提案

現在、上記の5点が授業課題として挙げられたが、それらを新学習指導要領に合わせた授業目標（小学校高学年用）として取り組んでいくことを提案する。以下に1課題ずつを提案する目標と共に記す。

課題① インプットが不十分でアウトプットを急ぎ、「発話しただけ」が多い。

インプットをたくさんするという共通認識はあるが、それらが十分に活用されていない。入れたものを児童がしっかりと使え、発話できることが楽しい、自分の言いたいことを言いたいと思えるよう、そして繰り返しその表現に出合わせ、子どもたちが使えるようにする必要がある。また、チームティーチングの特性を生かし、生きた会話を聞かせて児童には何を話しているのか推測させることはできているようだが、インプットをしたらすぐにアウトプットをさせる傾向がある。段階を丁寧に踏んだたくさん「聞く」活動が必要である。残念なことにインプットをしただけの活動は、ペアを探すだけ、穴を埋めるだけ、カードを集めるだけ、速さを競うだけになる危険性がある。ただの遊びで終わってしまえば、中学校への連携はおろか、小学校で何を学んだのか覚えていないという引き金になる（課題⑤）。きちんと段階を経た音声中心の指導

が大切であり、習ったことを自分の言葉で操れるようになるまで、繰り返し聞き、理解できるようにする必要がある。文字指導に関してもいきなり文字を書かせることはしないで、十分聞かせ、音と文字との一致を図ることが大切である。

提案する目標①

育成する資質・能力：

- (1) 外国語の音声や文字、語彙、表現、文構造、言語の働きなどについて、日本語と外国語との違いに気づき、これらの知識を理解する。
- (2) 実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能を身に付けるようにする。
(文部科学省「小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック」p.16 参照, 2017b)

新教材の“*We Can!*” (文部科学省, 2017b) では、*be*動詞、一般動詞、進行形、過去形と入り混ざって導入されている。特に6年生の新教材には今までにない過去形が導入されているが、それらの過去形は動詞の不規則変化から扱われている。

- 例) 第6学年 Unit 5 「*My Summer Vacation* 夏休みの思い出」より
(文部科学省「小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック」2017b, p.63)
- I eat pizza. It's delicious.* ⇒ *I ate pizza. It was delicious.*
I go to Okinawa. ⇒ *I went to Okinawa this summer.*

その理由として、規則変化をする *-ed* の単語より明らかに音が違う不規則動詞の方が児童には聞き取りやすいからであろう。上記のように音の変化に児童が自ら「気づいて」、理解していくには児童が様々な表現をたくさん聞かなくてはならない。そのために、それらを聞く回数を多くする必要がある。

手立て：

- ・既習表現を何度も角度を変えて扱い、スパイラルに「たくさん聞かせる機会を増やす」。
- ・「話す【やり取り】」を十分に聞かせ、繰り返し新出の言語材料（語彙と表現）を聞かせる。

- ・モジュール時間の利用、または担任の強みを生かし、クラスで機会をとらえて同じ表現を聞かせる時間を増やす。
- ・様々なシチュエーションで同じ目標表現を扱い、どういう時にどのような表現を使うのかを児童に理解させる（児童自身に気づきをもたせる）。同じ表現に多く出会っていると、聞いているとわかるようになってくる。そのうち英語のルールにも気づくことができるようになる。

例) 物の名前の前に“a”がついてる。

たくさんの時は“s”が聞こえる。

質問する文の時は語尾が上がっている。

時間を言う時は“at”が数字の前についている。 等

- ・同じ表現を繰り返し聞くことにより、英語で考えられる頭を作る。そして英語で聞いて、英語で理解する回路を作る（岡, 2017）。

例えば、毎回の授業の初めに天気や季節などを取り入れているクラスは、自然と子どもたちも英語でそれらの語彙や表現を言えるようになってきている。繰り返し何度も同じ語彙や表現を聞いているからであろう。また、クラスルームイングリッシュも決して文字を読んでいるわけではないのに、最初はジェスチャー付でもよいので何度も繰り返し聞いているうちに指示された通りに児童は行動することができている。

たくさんのインプット（担任の語り掛けなど）があり、たくさん聞いたり見たりする機会が多いと記憶に残りやすくなる（提案する目標⑤）。聞いているうちに覚えることもできるため、わかった時に文字で確認すると音と文字の一致を図ることができる。児童の「気づき」を促し、あいまいさに耐えることを続けることで、「理解」にもっていく（岡, 金森, 2015）ことができる。

サンプル：

(1) 今朝は何を食べましたか？

A : Good morning. Did you eat breakfast this morning?

B : Yes, I did. Did you eat breakfast? (How about you?)

A : Yes, I ate rice balls, *natto*, and fried eggs.

B : Oh, you ate rice balls, *natto*, and fried eggs. That's nice.

A : What did you eat?

B : I ate sandwiches, a boiled egg, and bananas.

A : You ate sandwiches, a boiled egg, and bananas. That's wonderful.

(2) 冬休みにどこに行きたいですか？

A : Summer vacation is over. Do you have any plans for winter vacation?

B : Winter vacation? No, not yet.

A : Where do you want to go?

B : I want to go to Nagano. I want to ski, I want to eat *Shinsyu* soba.
I want to buy *nozawana*.

A : Oh, you want to go to Nagano. That's nice. I want to eat *Shinsyu* soba, too.

B : Where do you want to go?

A : I want to go to Canada. I want to ski in Canada.

I want to eat pancakes. I want to buy maple syrup. I want to visit Montreal.

B : You want to go to Canada. That's great.

課題② 会話の状況設定とやり取りが不自然で、目的が不明瞭である。

大学生への英語学習に関するアンケート（澁井, 2017）によると、「何のために英語を学んでいるのか、何をやっているのか意味がわからない、そして実生活に役立つと思えない。」から英語学習の必要性を感じなかったという結果も出ている。しかし反対に目的がはっきりしており、すぐに日常で使えそうだと思うとやる気に繋がっていることから不自然な会話は動機づけが下がるようである。

小学校ではコミュニケーションの素地を養うことが目標であるが、会話の状況が不自然なことが多く、児童の日常に沿っていないことが多い。例えば極端な例では、挨拶もなくいきなり“I want a banana.”という会話が行われており、会話が単調過ぎてインタラクションも少ない。更には会話の中でうなずき等の自然なリアクションを行うことも乏しいようである。

提案する目標②

育成する資質・能力：

コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、身近で簡単な事柄について、聞いたり話したりする。(文部科学省「小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック」p.17 参照, 2107b)

意味のある活動をデザインし、自分の言いたいことが必然性のある状況で言えるようになることが大切である。単に入れ替え練習をしているだけ、ゲームのようにただ「発話した」だけでは不十分であり、児童が自分の言葉として操ることができるようにはならない。

手立て：

- ・児童の興味・関心のある内容、身近な内容を扱う。また、発話の状況もナチュラルな会話や状況設定が欠けていることが多く、必然性のある状況でリアクションを入れるなど、日常会話で本当に行われているやり取りを扱い、見せる。
- ・何のための【やり取り】なのか、目的をはっきりさせる(状況設定の明確化)。

サンプル：(活動事例)

今年の冬休みの計画を立てよう。

理想の給食のメニューを考えよう。

運動会で着るTシャツをデザインしよう。

外国の観光客に東京の名所を紹介しよう。

ハッシュドポテトを作ろう。どのように作るのかな。

友達の誕生日プレゼントを作る材料を買いに行こう。

自分の理想の時間割を作ろう。その理由を言ってみよう。

野菜・果物は水に浮かぶのかな、沈むのかな。実験しよう。

ALTの国と日本のお正月とを比較しよう。何を食べるのかな。何をするのか。

遠足のお菓子を500円以内で買いに行こう。どんな組み合わせができるのかな。

ワールドバザールでできるだけ多くの商品を売ろう。できるだけ安くたくさんの商品を買おう。等

課題③ 児童が自分の考えを持ち、しっかりと伝える機会が少ない。

例えば、“I like summer.”などのように好きな季節を言う単元で、好きな季節を選び、その季節が好きな理由を述べる。または、“I want to be a police officer.”というようになりたい職業を選び、そのなりたい理由を述べる。といった理由づけをさせる場合、普段理由を考え慣れていない児童は、その場で即座に考えたありきたりな理由しか述べられない。しかし、国際社会で求められているのは、論理的に考える力、クリティカルにもものを見る考え方である。小学生の時からしっかりと自分を見つめたり、自分の考えはどういうものかを探ったりする機会を持つ必要がある。

児童が自分のことばで、自分のことを発せられるようにする必要があり、パターンプラクティスや、習ったことをオウム返しに言えるだけでは本当に自分の考えを述べていることにはならない。そこで英語で考える思考をつくるために、岡（2017）の「先生の質問の段階をあげていく」ことをすると効果が出るのではないだろうか。

提案する目標③

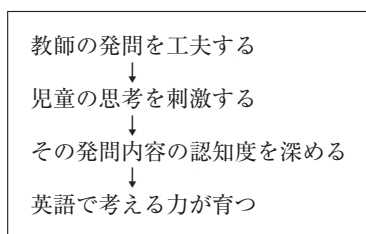
育成する資質・能力：

自分の考えや気持ちなどを伝え合うことができる基礎的な力を養う、コミュニケーションを図ろうとする態度を養う。（文部科学省「小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック」p.17 参照, 2017b）

手立て：

- ・ステップを経たやり取りを行い、自分の考えを人に伝えられる機会を増やす（岡, 2017）。
- ・「考える」ことを習慣化させる。：思考を促し、言葉の持つ働きや価値に気づかせることで、学習動機を高めることができる（田中, 2010）。
- ・先生の質問の工夫をして先生の質問の段階を上げていく。
 - 徐々に英語で考える力を育てる（岡, 2017）。

教師の発問を工夫することで英語をたくさん聞かせ、英語で理解させることができる。それには先生の質問の段階をあげていき（岡, 2017, p.17）、次のようなステップを踏む必要がある。そうすることによって英語で考える力が育ってくる。



(岡, 2017)

具体的には、教師は児童に対して「考えさせる発問をする」。そして、どうしてそのような返答になるのか、児童に「考える」機会をもたせる。そのように考え、更にどうしてそう思うのかその理由を3つ述べることで児童は論理的に考える (critical thinking) ことができるようになる (岡, 2017)。

田中 (2010) は以下のような中学校英語のテキストにある会話文を例に、教師の発問の仕方を次頁のように挙げている。

Mike : What do you have for breakfast?

Judy : I have cereal. How about you?

Mike : I have rice and miso soup.

Judy : Oh, really?

(*New Horizon English Course 1*, 東京書籍)

これらは中学校英語のテキストを例に挙げているが、小学校においても「考えること」をさせる手立てとして参考にできるのではないだろうか。

小学生のうちから「なんでだろう」と論理的に考えさせる訓練が必要である。

サンプル：

(田中, 2010)

- | |
|--|
| (1) 断片的な情報を尋ねる。
↓ |
| (2) 事実を尋ねる (fact-finding questions)。
MikeはJudyに何と質問しましたか？
↓ JudyはMikeの質問に何と答えましたか？ |
| (3) What? 推論を促す (inferential questions)。
↓ 欧米文化の人は朝食に何を食べているのか？ |
| (4) How? 説明 (どう感じるのか)
Mikeが朝食にご飯とみそ汁をいつも食べているとJudyが知ったら
↓ どう感じると思うか？ |
| (5) Why? 理由 (なぜ)
JudyはなぜOh, really?と言ったのか？ |

課題④ 文字指導 (書く・読む) の方法がよくわからない。

文字も導入するとなると、段階を踏まないで児童各自にすぐにかかせていることが多い。小学校の最初の導入の仕方を間違えると英語嫌いになる危険性もある。書くことに関しては、特に学校外で習っている児童と習っていない児童との差が生まれたり、書いている経験値に差が生じたりする可能性があるため、一斉授業の小学校でこの差をどのように扱うのが課題である。また、音と文字が一致していないとわからなくなることもあるので、文字の導入には細心の注意が必要である。そういう面が今後の課題ではないだろうか。

提案する目標④

育成する能力・資質：

- (1) 読むこと、書くことに慣れ親しみ、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能を身に付けるようにする。
- (2) 身近で簡単な事柄について、聞いたり話したりするとともに音声で十分に慣れ親しんだ外国語の語彙や基本的な表現を推測しながら読んだり、語順を意識しながら書いたりする。(文部科学省「小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック」pp.16-17 参照, 2107b)

手立て：

- ・音声から入り、十分に聞かせる。そして音になじませ、意味がわかるように

する。その後、文字で確認することも可能となる。

- ・「音と文字の一致を図る」ことで読めるようになる、文字を書くことができるようになる。

サンプル：

効果的な文字の導入の仕方とは

- ・歌や絵本の活用

読み聞かせ⇒拾い読み⇒なぞり読み（門田, 2014）

活字体で書かれた文字を見て、どの文字であるか識別する。

この際、教師が文字のみのスクリプトを児童に渡すよりも絵や意味も載っているスクリプトの方が児童の読みは活性化される（深澤, 2017）

読み方を適切に発音する。

「主体的・対話的で深い学び」を実現するために対話を取り入れる。

- ・「書く」段階を踏む

空書き⇒上からなぞる⇒点線をなぞる⇒手元のお手本を写す⇒黒板のお手本を写す⇒自分で書く⇒自分の書きたいことを書く

音声中心で音と文字の一致を図り、必然性のある場面設定（本当に使う会話を扱う）を行う。週に何回も既習表現、または同じ表現を聞かせた後で、補助的に文字を見せて理解を深める。

課題⑤ 児童が小学校での学びを覚えていることが少なく、中学校へと繋がらない。

中学生への聞き取りによると、「小学校外国語活動は楽しかった。でも、何をやったのか覚えていない。」との回答があった。加えて過去に、中学1年生の元教え子に中学の英語の授業を見学した時に、その授業で扱ったものが小学校で同じであったため、「これと同じ表現をやったことあったわね?」と尋ねても覚えてないと言われたことがあった。やはり、慣れ親しむだけで、インテイクにはなっていなかったことが明らかである。

小学校だからできる授業を再考する。そして中学校への橋渡しができるような小学校での取り組みが必要ではないだろうか。

提案する目標⑤

中学に進学した時「小学校でやったことがある」と記憶に残す必要がある。

小学校の外国語科：

得意なものを紹介し合う活動において、I am good at playing tennis. という表現に触れて、その意味を把握したり、自ら活用したりする。しかし、動名詞や過去形を文から取り出して指導することはしない。「代名詞」の用法や「動名詞」の用法について理解し活用するのは中学校の段階で扱う（文部科学省、2017c, p.35）。

手立て：

小学校で「楽しい」「できる」「わかった」という経験をたくさんさせる。

↓ 中学への橋渡しをする（小中連携）

中学ではたくさん聞いて、小学校において目で見たことのある物をルールとして再認識させる。

↓

学んだことの理解をより深め、定着を図る。

小学校に入学する前に既に英語を楽しいと体験していた学生は、小学校・中学校へと進んでからも英語に興味を持ち続けていた（澁井, 2017）。そのことから、小学校では英語にふれる楽しさと英語を使って人と会話することに喜びを感じることができると理想的である。そのためには、コミュニケーションを主体として、知識や技能を身につける指導が必要である（吉田, 2017b）。

サンプル：

低学年一休を使って、全身で英語を楽しむ。

リズムよく英語に親しむ。

たくさんの繰り返しを楽しむ（低学年は繰り返し、同じことも楽しめるため）。

低学年にあった気づきを促す。

中学年一様々な会話を楽しみ、色々な表現にふれる。

クラスの中で、お互いを理解し合い、たくさんの友達と関わる活動を取り入れる。

アルファベットに親しむ。

様々な気づきを促す活動をする。

高学年—相手に質問してそれに答えての1往復の会話だけでなく、ある程度の量の会話を聞いたり、発話したりする。

他教科との連携を図り、英語で考えたり、調べたりして発表活動をしたり、自分の考えを自分の言葉で言ったりする知的な活動が扱える。

文字に親しみ、たくさん聞いた音と文字の一致ができ、書き写すこともできる。

また、小学校と中学校との連携を図るには、次のような取り組みも可能ではないだろうか。

小中連携の仕方（例）

- ・お互いの授業を見学し合う（特に中学校の先生には小学校の授業内容を理解してもらう）。
- ・情報交換をする（中学の先生にどのように小学校で児童を育てると中学で良いのか、小学校を卒業した児童が中学校の英語の時間ではどのような状態なのかを尋ねる、等）。
- ・中学生を小学校へ招いて交流授業を行う（部活動紹介、授業紹介等）。

今までは、小学校外国語活動の目的が慣れ親しむだけでよく、定着させることを避けていたため、中学生はほとんど小学校で取り組んだ英語を覚えておらず、また、小学校での授業も1単元4時間ほどのため毎回言語材料が変わり、新しいものが入っていた。加えて前時の復習もそれほど行われていないことが多いため、「授業でふれました」だけで終わっていることが多かった。このように児童が学んだことを覚えているまで到達していないのが現状であった。

これからは、1単元が8時間になるのでそれらの時間を有効に活用することができる。小学校では会話を楽しみ色々な友達とコミュニケーションを図るやり取りを増やす。また、他者と関わりお互いを知り、理解できるようになるための協働学習は大切である。そして、クラス全体でのやり取りや発表など行っていくことで中学校への連携が可能となることが望ましい。

おわりに

今回、小学校の授業見学をした地域で共通して抱えている授業課題を5つ取り上げ、それらを新学習指導要領に沿った新たな授業目標として提案した。今後小学校英語が教科化になっても中学校とは違った、小学校だからできる、小学生だから行うべき授業内容を考察するべきである。

今後小学校で行う英語教育は、「人とコミュニケーションを図り自分の意見を言う力、相手の考えていることを受け入れ、理解しようとする態度の育成、そして力を合わせて取り組む大切さ等、コミュニケーション力の素地を養うこと。」を忘れず継続し、そこに加えて「英語の4技能5領域（聞く、話す【やり取り】・話す【発表】、読む、書く）の力を伸ばしていくこと」が更なる今後の目標となるため、バランスの良い指導が望まれる。

引用文献

- 岡秀夫、金森強（2015）『小学校外国語活動の進め方－「ことばの教育」として－』東京：成美堂
- 岡秀夫（2017）「英語教育学研究：残された課題」『2016年度JACET関東支部紀要』第4号、4-21
- 門田修平（2014）『英語上達12のポイント』東京：コスモピア
- 瀧井とし子（2017）「大学生への小学校外国語調査から見る小学校英語の利点と課題」獨協大学『外国語教育研究所紀要』第5号、119-137
- 田中武夫（2010）「よい『発問』・わるい『発問』：授業を変える発問とは」『英語教育』、59（1）、10-13
- 鳥飼玖美子（2016）『本物の英語力』東京：講談社
- 深澤信也（2017）「意味と文字の同時提示が単語の読みに与える影響－単語の文字列を読む際に意味は有効なのか－」『JASTEC研究紀要』第36号 pp.15-31
- ベネッセ教育総合研究所（2017）「学び育む」読売新聞2017年6月16日
- 村野井仁（2006）『第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法』東京：大修館書店
- 文部科学省（2008）『小学校外国語指導要領解説 外国語活動編』東京：東洋館出版社
- 文部科学省（2013）「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/25/12/1342458.htm
- （2017a）次期学習指導要領
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1383995.htm
- （2017b）「小学校外国語活動・外国語 研修ガイドブック」
http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1387503.htm
- （2017c）「小学校学習指導要領解説外国語編」
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1387014.htm

吉田研作 (2017a) 「学ぶ育む」読売新聞2017年6月16日
—— (2017b) 「2020年度からの英語教科化に向けて」J-Shineシンポジウム (2017東京) 吉
田研作 <http://www.j-shine.org/>
NEW HORIZON English Course I 東京：東京書籍

